神への憧れ

人間のがあいまでは、 をははは祖国するとののののののののののののののののののののののののののののののののでは、 のののののののののののののののののののののののでは、 では、 では、 では、 では、 では、 でいるののでは、 でいるのののののののでは、 でいるののでする。 でいるののでする。 でいるののでする。 でいるののでする。 でいるののでする。 でいるのののののです。 でいるののののです。 でいるののでは、 でいるののでする。 でいるののでは、 でいるのでは、 にいるのでは、 にいるのでは

1. 神への憧れ:人間は神に向かう存在——完全な幸福への欲求

「人間は幸福になるために造られて いる。ちょうど鳥が飛ぶために造ら れているように と、19世紀のある ロシアの文学者は書きました。誰も が幸福、自分自身の善を求め、その ために最も適切だと思う道に自分の 人生を向けます。人間を高め、豊か にしてくれる善を享受できるとき、 私たちは幸せを感じます。しかし、 人生において幸福はいつも影を帯び ています。それは、よいものを手に 入れたあとに慣れてしまうからとい うだけでなく(望んでいたものを手 にするとしばしば起こることで す)、もっと根本的には、どんな被 造界の善も人間の幸福への渇望を完 全に満たすことはできず、しかもそ れらは過ぎ去るものだからです。

私たちは身体と霊魂が結ばれて一つ となっている存在、人格的な存在で す。霊的な次元を持つことによっ て、私たちは人、制度、物質的な 財、成長を助ける道具などの具体的 なものごとを超越することができま す。現実のさまざまな面を知って も、私たちの知る力や問いの力は尽 きることはありません。新しいこと を知り、より深く理解することが常 に可能だからです。望み・意志につ いても同じことが言えます。どんな 被造物も私たちを完全に、永遠に満 たすことはありません。私たちはさ らに愛することができ、さらによい ものを愛することができるからで す。そして、そのように前へと突き 動かされています。新しい目標を達 成すること、周囲の問題や現実をよ りよく理解すること、新しい状況や 経験を得ることを私たちは好みま す。私たちは人生においてそういっ たものを求め、それらを得ることが できないとき気落ちします。私たち

の心には常に充実への憧れがあり、 それは人間の中にある偉大さのしる しです。私たちのうちには、人生を 構成する一つひとつの具体的なもの ごとを超越する〈無限〉がありま す。

しかし、この世界は過ぎ去っていき ます。私たち自身も、周囲もすべて 移ろいます。愛する人々、成し遂げ た成果、楽しんだ善、それらを永遠 に留めておくことはできません。私 たちはそれらを握りしめ、いつまで も保持したいと願いますが、それが できないことを心の深くで感じてい ます。それらは一時的な幸せしか与 えないことを知っているからです。 「すべてのものは、その朽ちる性質 の刻印を約束のうちに秘めている。 そして、その恥ずべき傷を隠し、無 警戒の者を欺くために、鮮やかな装 いをまとうのである | т。この地上 的なものが持つ影は、私たちの不安 と恐れを呼び覚まし、そうであって

ほしくないと願わせ、欠けることの ない完全に充実した命への道が存在 することを憧憬する心を引き起こし ます。これが人間の心の奥深くに存 在する救いへの憧れです。

こうして私たちは、人間の中に二つの異なる憧れを見いだします。それは「超越への飢え」を示すもので・は、善いきに出会うときには、存在れが自然を経験するとったがに変め、生存・正義・平するとったがはは、の憧れが目覚めます。これらはたいなり体験であり、この世を超えます。の体験であり、この世を起えます。

人間は幸福のために造られています。しかしこの世の幸福は常に未完で、幸せは垣間見えても、それはどこか手の届くところの向こうにあり、決して完全に手に入りません。そのため、人間の精神の奥には物足りなさ、不満、幸福への郷愁があ

り、それは秘められた希望――永遠の幸せ、永遠の愛という夢を満たす最終的な住まい、決定的な祖国への希望を指し示しています。私たちは地上的な存在ですが、永遠なるものに憧れます。

この欲求そのものが宗教心を生み出 すわけではありませんが、神を指し 示す〈しるし〉となります。人間は 宗教的な存在です。なぜなら、この 世界における体験や経験は、人をそ のあらゆるものごとの基となる存在 ――すなわち神――について考える よう仕向けるからです。人は自然に 行う哲学的思索を通して神を知るこ とができます。自然の秩序や美し さ、命への感謝、愛される喜び…、 それらはその源となる〈神秘〉へと 私たちを導きます。また人間のさま ざまな精神活動――自らを省みる能 力、文化的・技術的に進歩する力、 自らの行為の道徳性を認識する力 ――も、人間が、他の物質的存在と

は異なり、物質的宇宙を超越する存在であることを示しています。そしてこれらは、人間存在のこうした特質を説明しうる、より高次で超越的な霊的存在を指し示しています。

哲学者や神学者たちの中には次のよ うに考えた人たちがいます。人間が 本質的に宗教的な存在であるという ことは、神は、人間を創造するにあ たり、最終的かつ決定的な召命―― つまりイエス・キリストにおける神 との一致――をすでに何らかの形で 準備した、と。たとえばテルトゥリ アヌスは、異教徒が「神は偉大であ る|「神は善である|と言っている のを聞いて、人間の霊魂は何らかの 形でキリスト教信仰に向けられてい ると考え、『護教論』に「魂は本性 的にキリスト教的である」(17.6) と記しました。

聖トマス・アクィナスもまた、人間 の究極目的と人間の霊が無限に開か れていることを考え、人は「神を見たいという自然的な望みを持っている」(『対異教徒大全』lib.3, c.57, n.4)と述べました。しかし人間は自身の力でこの望みを叶えることができません。それは神がご自分を現し、〈神秘〉から出て、人間と出会い、ご自分をありのまま示されるときにのみ実現するのです。これが神の啓示です。

『カトリック教会のカテキズム』は次のように要約しています(27番)。「神へのあこがれは人間の心に刻まれています。人間は神によって、神に向けて造られているからです。神はたえず人間をご自分に引き寄せておられます。人間はただ神のうちにだけ、求めてやまない真理と幸福を見いだします」。

[1] J. L. ロルダ『十字架のしるし』 (J. L. Lorda, La señal de la Cruz, Rialp, Madrid 2011, pp. 65-66)。

Antonio Ducay

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/kami-akogare1/(2025/11/29)